

藤原宮朝堂院東第六堂出土の瓦

—第136次

はじめに 藤原宮朝堂院東第六堂の調査（第136次）は、藤原宮の朝堂一棟全体を調査した唯一の例であり、瓦類の出土量も整理用コンテナ4,000箱と、過去最大となった。このため、概要報告段階（『紀要 2006』）では主要内容に限って報告した。その後、全体の整理作業を終えることができたので、ここで改めて報告したい。

出土瓦の概要 集計の結果、出土瓦の総点数は240,713点、総重量28t以上という膨大な数量に上ることが判明した。内訳は、軒丸瓦が10型式20種605点、軒平瓦が10型式18種616点、道具瓦類が837点、丸瓦が57,907点（7,152.07kg）、平瓦が180,748点（21,104.43kg）である（表26）。

主要な軒瓦の組み合わせは、『紀要 2006』にて報告したとおりであった。もっとも多いのは高台・峰寺瓦窯産6273B-6641Eで、安養寺瓦窯産6281A-6641C、西田中・内山瓦窯産6281B-6641F（瓦窯推定は石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究Ⅴ』2010に依拠）がこれに次いでいる（図173）。これらの組み合わせは、朝堂院東第三堂・第四堂所用とされる軒瓦の組み合わせと一致するが、第136次調査では大極殿院所用瓦とされる6273B-6641Eの数量が突出している点で異なる。

なお、造営期の溝や土坑からも瓦が多く出土している（表26下段）。軒平瓦に比べ軒丸瓦が少ないことや、軒丸瓦6273Bがみられないなど、造営後の軒瓦の組み合わせとは組成に違いがあるものの、藤原宮所用瓦でも古相の型式に偏るといった傾向はみられない。

范傷進行と製作技法 軒丸瓦6273Bは製作技法等からⅠグループとⅡグループに分けられ、Ⅰ→Ⅱという新旧関係が想定されている（石田 前掲）。Ⅱグループは大極殿院・朝堂院の調査で広く出土しているが、Ⅰグループは大極殿院の調査である第20・117次調査でのみ少数確認されている。第136次調査では大半がⅡグループに属するものの、Ⅰグループに属する資料も少数含まれていた。また、軒平瓦6641Eも范傷進行からみて新古2段階に分かれる。やはり古段階の資料は少なく、大極殿院の調査でのみ出土しているが、第136次調査でも古段階の資料を少数確認した。したがって、第136次調査においてもっとも出土量の多い6273B-6641Eには、大極殿院の

調査で出土した同組み合わせとの共通性がある。軒丸瓦6281Aは、范傷進行により第1段階から第3段階に分かれるが、今回、段階判別のできた43点のうち6点が第1段階に属する。これは、東第一堂・第二堂所用とされる軒瓦の特徴と共通する。

第136次調査では東第六堂の全体を発掘しているため、出土瓦が東第六堂所用瓦を概ね反映しているとみるならば、東第六堂所用瓦には范傷進行や製作技法の面で、大極殿院・東第一堂・第二堂所用瓦との共通性を認めることができる。上記してきた范傷進行・製作技法の分析によって、大極殿院・東第一堂・第二堂所用瓦は東第三堂・第四堂所用瓦より製作が先行するものが多いとされているが（石田 前掲）、今回の分析からは東第六堂所用瓦も前者と同じく古相の特徴を持っていることになる。この事実が、藤原宮中枢部の造営順序に関係するかどうかは今後の検討課題である。ただし、東第六堂から出土した遺物量は膨大で、それ以外の調査とは総量が大きく異なることは注意しておくべきであろう。

范傷進行と製作技法で3段階に区分される軒丸瓦6275Aは、本調査区では第1・2段階の資料が同程度の比率で出土した。これは大極殿院南門・朝堂院の一般的出土傾向に合致する。第1段階の資料が中心となる東面北門・大垣よりも遅れて、宮中枢部への瓦搬入が始まるという見解を追認する事実である。

ちなみに、大極殿院の東に位置する礎石建物SB530や朝堂院回廊東北隅では、6275Aでももっとも後出とされる第3段階のものが中心となる（「朝堂院朝庭の調査-第153次」『紀要 2009』）。朝堂院東面回廊（第120・125次）出土の6275Aも、第1段階のものはわずかで、第2・3段階のものが半数程度ずつからなる。礎石建物SB530と朝堂院回廊出土の軒平瓦6643Cも、製作技法からみて相対的に新しい時期に属する。こうした事実は、朝堂院回廊の完成が遅れるとみる、これまでの遺構解釈とも調和的である（「朝堂院東南隅・朝集殿院東北隅の調査-第128次」『紀要 2004』）。なお、第136次調査で出土した軒丸瓦6275Aは調査区西側に偏って出土しており、東側の朝堂院回廊の瓦が多量に混入した可能性は低い。

多量のヘラ描き瓦 もう一点、第136次調査出土瓦を特徴づけるものがヘラ描き瓦である。軒瓦では軒平瓦6641Fと6641種別不明に施されたものが計42点認められ

表26 第136次調査出土軒瓦および道具瓦集計表

全 体								
軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6233	Ac	1	6561	A	1	面戸瓦	381	
	Ba	2		Aa	1	鬘斗瓦	19	
	—	1		Ab	30	隅切平瓦	4	
6271	A	1		C	112	谷樋瓦?	1	
6273	A	13		E	135	ヘラ描き (平瓦)	318	
	B	160		F	123	ヘラ描き (平瓦側面)	5	
	C	43	(平瓦部ヘラ描き有)	F	36	ヘラ描き (丸瓦)	102	
	D	2		N	1	ヘラ描き (文字)	3	
	—	46		—	18	刻印	4	
6274	Ab	1	(平瓦部ヘラ描き有)	—	3			
	Ab/Ac	2	6642	A	8			
	—	4		B	1			
6275	A	18		C	14			
	B	10		—	1			
	C	10	6643	B	11			
	D	10		C	4			
	N	2		—	3			
	—	9	6646	C	1			
6276	—	2	6647	B	1			
6278	B	1		Ca	2			
	D	1		D	2			
6279	Aa	2		—	2			
	Ab	19	6663	I	1			
	—	1	6691	F	1			
6281	A	96	二重弧		1			
	B	61	四重弧		2			
	—	28	重弧		2			
巴		1	不明		99			
不明		58						
計		605	計		616	計		837

丸 瓦		平 瓦		総 計
重量 (kg)	7,152.07		21,104.43	28,256.50
点数	57,907		180,748	238,655

造営期の溝・土坑

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6273	C	1	6641	Ab	3	面戸瓦	17	
6281	A	2		C	8	ヘラ描き (平瓦)	6	
	B	1		E	4	ヘラ描き (丸瓦)	5	
				F	12			
			(平瓦部ヘラ描き有)	F	3			
				—	2			
			6642	A	1			
				C	2			
			6643	B	2			
				C	1			
				不明	7			
計		4	計		45	計		28

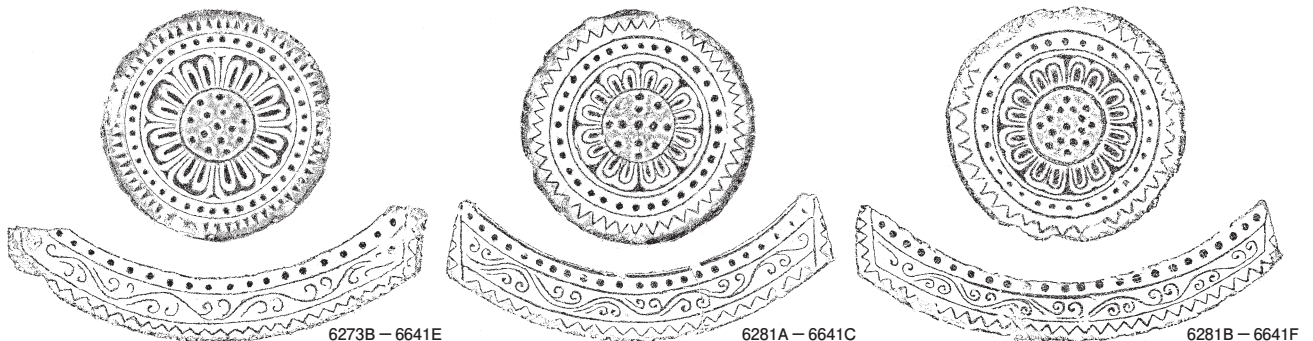


図173 第136次調査出土軒瓦の代表的組み合わせ 1:6

た。丸・平瓦にも439点にヘラ描きが認められる。ヘラ描きの内容があきらかなもののうち、もっとも多いのは「+」・「×」で、過半数を占める。このほか、直線を1本のみ、もしくは2本以上平行して刻んだヘラ描き瓦が目立つ（藤原宮出土ヘラ描き瓦については本書60頁参照）。

おわりに 第136次調査出土瓦全体の集計結果を報告するとともに、軒瓦の范傷進行や製作技法の所見等、新たな知見をまとめ、東第六堂所用瓦の特徴を示した。とはいえ、残された論点はまだ数多い。今後とも継続的に分析したい。

(森先一貫)